

令和5年度 小中連携教育推進校報告書

福木小学校
福木中学校

1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

本中学校区は一小一中であり、幼稚園、保育園も小学校に隣接している。小学校においては、学習内容が分からないと諦める児童が多く、粘り強く取り組む力が低いことが課題としてあげられている。また中学校にもほぼ同一の顔ぶれで進学する環境である。そのため、他者と競い合うことが少なく、学習意欲が低いという課題がある。令和4年度に実施された学習状況調査では、平日の学習時間が30分以下である生徒の割合が17.9%であり、全国平均の8.5%を大きく上回る結果である。中学校で実施した実力テストでは、5教科とも県の平均より低く、学習面に課題がみられる状況である。特に英語に関しては、中3になっても県と比べて平均点が低く、記述すること、読解すること、表現することに対して、苦手意識が強い。

また、人間関係が限られていることから、コミュニケーション能力が乏しいことや、周りからの評価を気にしすぎているため、自分に自信がもてず、主体的な言動が見られないという現状がある。

生徒指導的な問題では、以前から、体験授業や部活動体験を小中連携として取り組んでいることをのぞき、具体的な小中連携の取組はこれまで実施したことはなく、連携を進めている状況である。

2 研究主題

「『やってみよう』『できた!』に支えられた学力の向上」
～小中学校9年間を見通した学習や生活のつながりを目指して～

3 取組内容

※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

(1) 授業における小中連携

- ・中学校の教員が週2時間、小学6年生の外国語の授業を行い、小学校教員とともに、主にTT形式での授業をおこなう。
- ・小学校教員と中学校教員が連携し、主に外国語科における学力課題の把握を行う。
- ・中学2年生の生徒が外国語科の授業において、中学校の様子を英語で小学6年生に紹介したり、小学6年生との簡単なやり取りをしたりする授業交流を行う。(図1)
- ・中学3年生と小学6年生がそれぞれ合唱を披露しあい、感想を交流する。(図2)
- ・中学3年生の小学校への職場体験学習の実施。
- ・授業規律「福木中スタンダード」と「福木小スタンダード」の内容の共有。

(2) 授業外における小中連携

- ・小学6年生を対象に実施される部活動体験時に中学生と小学生の交流を図る。
- ・小学6年生から中学生に聞いてみたい質問を募集し、その質問に中学1年生や生徒会に所属する生徒が回答して、意見交流を行う。(図3)
- ・週1回生徒指導連携会議を実施継続する。

(3) 小中合同での学校運営協議会・研修の実施

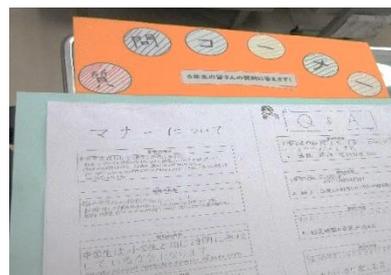
- ・年2回、小中学校合同で学校運営協議会を実施する。
- ・年2回、小中合同の研修会を実施する。



【図1】英語授業交流 練習の様子



【図2】中3小6 合唱交流会



【図3】小学6年生からの質問への回答

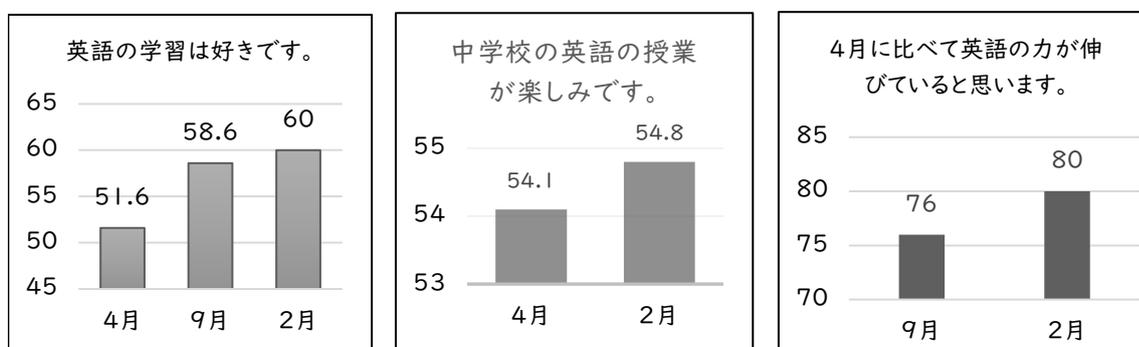
4 検証結果

※成果指標の検証方法および結果

(1) 授業における小中連携

1. 英語授業内アンケート結果について

2023年4月、9月、2024年2月に小学校6年生に向けて外国語科の授業アンケートを実施し、それぞれの項目で、「よくあてはまる」「ややあてはまる」と肯定的な回答をした児童の割合を示している。(図4)



【図4】小学6年生 外国語科授業アンケート結果

「英語の学習が好きです」と答えた児童の割合は、51.6%から、2024年2月には60%に上昇し、目標としていた「英語の学習が好きですか」の質問に対して肯定的な回答60%以上という目標を達成した。また、「中学校の英語の授業が楽しみですか」という質問に対して肯定的な回答をした児童は9月、2月ともに変化はほとんど見られなかった。また、「楽しみではない」「あまり楽しみではない」と回答した児童の中には、「中学ではブンポーがはじまるから」「中学校の英語は、難しそうだから」という理由を書いているものがあつた。

中学校の外国語科の授業に対しては、楽しみにしている児童と不安を感じている児童の割合が同程度であったが、「4月に比べて英語の力が伸びていると思います。」という質問に対して約8割の児童は肯定的な回答をしていた。この結果から、授業を通して英語の力がついたという自信は持つことができていると考えられる。

2. 合唱交流会を通して 小中学生の感想の記述から

昨年11月に実施した合唱交流会では、お互いの頑張りを認め、褒める感想が多く見られた。中学生の中には、「自分の3年前を思い出して、自分が成長したと感じた。」や「小学6年生から元気をもらった」という言葉が見られた。中学校では、7月と12月に学校生活アンケートを実施し、「わたしにはよいところがある」という質問に対しての3学年の回答を比較した。そのうち、7月に比べて12月のほうが、より「わたしにはよいところがある」と感じている生徒は24名いた。その生徒の中には「来年私たちはいないけれど、小学6年生に手本を見せれたと思いました。」や「歌っているときに、今までがんばったな、と思える合唱ができた気がします。」という感想が見られた。

また、小学生からは「中学生になったら、今見たようなカッコいい姿になりたい」「はずかしくてあまり大声で歌えなかったけど、中学3年生さんたちは、はずかしがらずに大声で歌っていたのですごいなと思いました。私も中学に入ったら自信をもって中学を楽しみたいです。」と中学生への憧れを感想に書いている児童もいた。

(2) 授業外における小中連携

1. 小学6年生を対象にした部活動体験

10月に小学6年生を中学校に招いて、部活動体験を行った。中学生は部長を中心として、下級生に対してリーダーシップを発揮する機会になった。また、小学生からも部活をしている生徒の姿がかっこよかったという感想や、部活が楽しみになったという感想があり、中学校生活をイメージするきっかけになったと考えられる。

2. 週1回の生徒指導連携会議

継続して週1回、生徒指導連携会議を行うことで、小学校ではケース会議の数が以前に比べて減少した。また中学校においても、生徒の小学校での様子を知ることができ、児童生徒理解につながったという意見が出た。

(3) 小中合同での学校運営協議会・研修の実施

小中合同での学校運営協議会を実施したことで、小中の取り組みを互いに理解しようとする意識は生まれたという意見が出た。また、本年度は8月と11月に合同研修会を実施し、年2回ではあるものの、研修会を実施することで小学校の先生方との良い交流の機会になったという感想が出た。一方で研修会の場に限らず、気軽に小中の学習内容や指導の仕方等について交流できる機会が増えるとよいという意見もあった。また今年度は学習規律である「福木小スタンダード」と「福木中スタンダード」の内容を共有し、内容の統合を図ることができた。

5 研究成果

○成果

まず外国語科の取り組みでは、アンケート結果にもあるように、英語の学習が好きであると感じている児童が増えている。TT形式の授業を実施できたことで、低学力の児童の支援にも力が入れやすく、きめ細やかな指導ができたことで、より多くの児童が「できた!」の気持ちを感じることができたと考える。また、そのようなきめ細やかな指導・支援により力が伸びたと感じられる児童が多かったのではないだろうか。

今年度は小学6年生と中学1,2,3年生との交流の機会を、外国語科や合唱、中学校への質問など様々な形で設けることができた。合唱交流会の感想にもあるように、小中での交流の中で、中学校生活に期待を持ったり、中学生に憧れを抱いたりする良い機会になったと思われる。また中学校教員が小学校の外国語科の授業をすることで、中学校での決まりや学習のことについても小学生へ伝える機会ができた。

中学生にとっても、小中交流の場が「わたしにはよいところがある」と感じるようになった要因であるとは断言できないが、自分たちが活躍する場が増えたことや、小学生と交流することで自分の良さやこれまでの頑張りに気づききっかけになったことも示唆された。

小中学校の教員にとっても、合同の運営協議会や研修を通して、「福木中スタンダード」の内容を共有・統合することをはじめとして、小中学校の教員間での情報交換がしやすくなり、学校全体として小中連携を実施していくきっかけ作りができたのではないかと考える。小中連携をすることで、課題が新たに発見できたことも成果の一つであった。

●課題等

外国語科の授業では2人態勢で授業を行うことで、支援が手厚くなりすぎた面もあった。中学校ではより学習内容が難しくなり、自ら計画を立てて学習することが必要になるため、手厚い支援があることで、学習者の自立にはつながりにくいという意見が出た。また現在中学校では、学習計画表を配布し、子供たちが自分で毎日の学習計画を立ててから、学習に取り組むよう促しているが、生徒によっては、十分に計画表を活用しきれていない状況である。学習意欲が低いという課題を解決するために、小中連携しての取り組みができないか、来年度以降考えていきたい。

今年度は授業アンケートによる、英語学習に対する考え方などの変容を見とるにとどまった。来年度以降実力テストの結果等でも小中連携の効果を検証していきたい。今年度は、小中連携の初年度として、小学生と中学生が交流する場を作ることに重きが置かれ、交流する内容や目的があいまいであり、小中学校の交流が児童生徒にとって学びになったかどうか疑問が残る場面もあった。また、外国語科のアンケートでは「中学校の英語の授業が楽しみです」という質問に対して肯定的な回答をした児童は全体の半数程度であった。中学校教員が小学校で授業を行ったり、小学生と中学生との交流の機会が増えることで、中学校生活へ見通しを持ったり、期待感を持つ児童がいた一方で、中学校の学習内容や行事などへの不安を抱く児童もいた。

最後に、今年度は主に中学校側の小中連携研究推進リーダーと小学校6学年の教員が情報を交換し合い、小中連携の場作りを行った。その際にも外国語科の授業、交流機会の設定のための小中学校間の時間割や打ち合わせの調整が難しい場面が多くあった。特に児童の学習の評価の方法や異学年交流は、小学校と中学校で取り組むので、より早く情報共有をすること、より多くの教員が小中連携にかかわっていくことが必要不可欠であると感じた。

◇来年度に向けて

外国語科の授業アンケートの結果だけを見ても、中学校の学習に不安を持つ児童が半数程度いる状況である。中学校教員が小学校で出前授業を行い、中学校のことを伝えるだけではなく、児童の人間関係を把握し、小学校の先生から児童への支援について聞くことで、中1ギャップを解消できるのではないかと考える。

学習についても、今年度中学3年生を対象に実施された全国学力調査では、「聞くこと・読むこと・書くこと」の分野では、広島県の平均正答率が70%に対し、本校の正答率は65%であった。また、「話すこと」では全国平均正答率は12.4%に対し本校の正答率は5%と、どの分野においても平均を下回る結果となっている。小学校では、「聞くこと」「話すこと」を中心に言語活動を行っているため、その部分を生かしながら中学校の授業でさらに力を伸ばす活動を取り入れる等小中連携したさらなる取り組みが必要であると考えられる。

また、小中学校で時間を調整しあい、交流の場を作るのであれば、交流の内容や交流の目的を多くの教員で共有し、児童生徒に伝えていくことでより充実した小中交流の場を作ることができるのではないかと考えた。授業や行事等で児童生徒が交流する機会を作るだけでなく、小中の教員も交流できる機会を増やすことも今後検討していきたい。特に授業方法についてはICTの活用、課題の出し方等小中によって大きな違いがあり、より気軽に児童生徒や学習内容について話し、情報交換しやすい環境をつくるのが、児童生徒が通いやすい学区づくりにつながると考える。

この報告書は書庫等に掲載し、全市に公開します。2～4ページでまとめてください。

報告書とは別に資料を付けても構いません。令和6年2月29日提出締切